

氏 名 丹野 克子 (タンノ カツコ)
本 籍 山形県
学 位 の 種 類 博士(老年学)
学 位 の 番 号 博甲第 96 号
学位授与の日付 2020 年 9 月 7 日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 訪問リハビリテーションサービスを提供する理学療法士・作業療法士の介護支援専門員との連携に関する研究

論文審査委員 (主査) 桜美林大学教授 長 田 久 雄
(副査) 桜美林大学教授 中 谷 陽 明
桜美林大学教授 杉 澤 秀 博
国際医療福祉大学 白 澤 政 和

論文審査報告書

論文目次

第1章 序論	1
第1節 研究の背景	1
第2節 本研究の目的・意義と基本的視点	5
第3節 本研究における用語の説明	7
第2章 研究 1 訪問リハ職とケアマネジャーの相手職種との連携の展開	9
第1節 訪問リハ職の視点によるケアマネジャーとの連携の展開	9

第2節 ケアマネジャーの視点による訪問リハ職との連携の展開	17
第3章 研究 2 訪問リハ職に関するケアマネジャーの認識 —差異と関連要因	29
第4章 総合考察	40
第5章 結論	49
謝辞	51
文献	52
資料（図表および質問紙）	

論 文 要 旨

本論文は、訪問リハビリテーション（訪問リハと略す）職とケアマネージャー（ケアマネと略す）の2職種間の連携の構成要素、展開過程、機能を明らかにし、訪問リハサービス内容に関するケアマネの認識と要因を解明し、2 職種間の情報共有を把握し、その程度を明らかにすることを目的としている。このことにより、両職種間の連携上の課題が明らかになり、両者の実践方法の検討に有効であるという意義がある。

本論文は、第 1 章の序章、第 2 章の研究1、第 3 章の研究 2、第4章の総合考察から構成されている。第1章では、研究の背景として、地域包括ケアシステムに向けたリハビリテーションの課題、介護保険制度下の職種間連携に関する実践的研究が紹介され、訪問リハ職を対象とした連携研究の必要性が述べられている。これを前提として、本研究の目的と意義、使用される用語の説明が行われている。

第 2 章では研究1として、訪問リハ職とケアマネの相手職種との連携の展開過程が検討されている。10 人の訪問リハ職を対象として、サービス提供依頼のプロセス等のインタビューガイドに基づくフォーカスグループインタビューと、これを補完する個人面接が行われた。その結果、ケアマネとの人間関係、ケアマネとの業務の進め方、情報交換の機会に難しさがありながら、それを乗り越えて連携を図り、制度上・業務上に必要なプロセスが滞りなく進んでいることなどが明らかにされた。

一方、ケアマネの視点による訪問リハ職との連携の様態の検討としては、8人を対象として、訪問リハサービス利用中のプロセス等をインタビューガイドとしたフォーカスグループインタビューと、それを補完する個人面接が実施された。グループ面接からは、37の概念と4のコアカテゴリーが生成された。個別面接からは、連携の効果として特定職種の知識・技術が、他職種サービス内容に展開していくことなどが明確となった。

第3章の研究2では、訪問リハ職に関するケアマネの認識に関して、サービス提供内容と実施等に関する質問紙調査が行われ61組を対象として、ケア提供の一致・不一致を中心とした分析が行われた。訪問リハ職が、心身機能・身体構造、活動と環境因子の複数の要素を一体的に捉える視座に立っていることが確認され、訪問リハ職の年代が高くなるほど一致得点が低い傾向があった。また、ケアマネ事業所に訪問リハ事業所が併設されていることが一致率の高いことと関連していた。

第4章の総合考察では、職種間の連携の構成要素として、情報の授受方法と内容、連携上の工夫、連携の利益・不利益が述べられ、2職種間の連携の展開過程に関して、利用開始過程における連携の変化、連携上の満足と困難、連携の機能と効果、連携の限界という視点から整理され、訪問リハサービスに関するケアマネの認識とその要因に関して考察されている。

本論文の研究から、訪問リハ職とケアマネがともに義務的業務を超えた連携を行うことにより関係が築かれていること、連携に影響する要因として、利用者の経過、訪問リハ職の心理的・時間的負担、ケアマネにおける訪問リハ職との接触や訪問リハサービス利用経験、両者の専門志向と相互の関心度、指示書を出す医師等との関係、所属事業所の関係が見出された。連携の効果は両職が認識していたが、効果を期待することで連携が促進され、双方が高率性を求める工夫を行うことで連携の質が変化することが明らかにされた。

論文審査要旨

本論文は、介護保険制度下で、訪問リハビリテーション(訪問リハと略す)職とケアマネージャー(ケアマネと略す)の両者を対象として、2職種間の連携の構成要素、展開過程、機能を明らかにし、訪問リハサービス内容に関するケアマネの認識とそれに関連する要因を明らかにすることを目的としている。本論文の構成は、第1章の序章において、研究の背景、意義と目的、用語の説明が行われ、第2章の研究1において訪問リハ・ケアマネ2職種の相手職種との連携の様態が解明され、第3章の研究2において、訪問リハ職とケアマネの認識の一致・不一致が検討されている。第4章では総合考察が行われている。論文審査の経過において、目的の一層明確な記述を行うこと、考察の構成を見直しリハ以外の訪問看護・介護に関する対比を加えることなどの指摘があったが、これまで統一的視点から実証研究が行われなかった訪問リハ職とケアマネの連携に関して、十分な既存の文献の渉猟を行い、質的・量的な研究を駆使して解明しており、学位請求論文として合格の水準を満たしていると評価された。

口頭審査要旨

公開で30分の発表と30分の質疑応答の後、主査・副査により合否判定が行われた。質疑応答において、介護保険制度下で職種間の連携に関する研究は意義があり、本論文では、これまで充分検証されていない訪問リハ職とケアマネの連携に焦点を当てた調査により成果を上げたことには意義が認められると評価する意見があった。ケアマネは基礎資格が多様であるが、その影響に関してはどう考えたか、多職種のチームアプローチの中で訪問リハ職とケアマネに限って対象とした理由はどのようなところにあるか、知見が多様であるが断片的でもあるので、今後の発展の方向はどうかという質問があり、最初の質問に対しては、ケアマネの6～7割は福祉系の職、2割程度が看護職であり、偏りの無いよう調査対象の紹介を依頼し、分析過程でも背景職に関しては検討したとの回答があった。2番目の質問に対しては、3番目の質問とも関連して、訪問リハ職とケアマネとの連携を対象とした体系的研究が無いので焦点を当てたことと、職種によるケアの視点に関する気づきが異なることが、ケアサービスに有益な情報として活かせることが今後の展望となるとの回答があり、いずれも了承された。さらに、多職種連携の理論化が重要となってきているので、海外の文献の展望なども含めて今後理論的観点からの検討も進めることが望まれるというコメントがあった。

以上の結果、主査・副査が全員一致して、本論文は学位請求論文として合格の水準を満たしていると判定した。